

医療界が言語聴覚士に求める人材像調査

—校内指導に対する実習指導者からの見解を通して—

富井浩子^a 竹内洋彦^a

^a 長野医療衛生専門学校 言語聴覚士学科

Survey of what the medical community is looking for in Speech-Language-Hearing Therapists

Hiroko Tomii^a Hirohiko Takeuchi^a

^a Department of Speech-Language-Hearing Therapists, Nagano Medical Hygiene College

要旨

背景：言語聴覚士学校養成所カリキュラム等の見直しが進められ、令和7年4月の入学生からの適応が検討されている。高齢化を含む社会の変化も相まって、言語聴覚士に求められる人材像も変化してしてきた。

目的：医療界が言語聴覚士に求める人材像を調査する。

方法：令和5年度に本学科臨床実習指導の実績のある指導者に対し、実習終了時点で質問紙による調査を行う。

結果：コミュニケーション力、探求心、客観的思考、人間的成長が求められていることが確認された。

キーワード：言語聴覚士、求められる資質と能力、臨床実習指導者

1 はじめに

言語聴覚士（以下 ST）は1998年に国家資格として施行された。制定から現在までの高齢化、医療技術の進歩を含む社会の変化に付随して、言語聴覚士を取り巻く環境も大きく変わってきた。コミュニケーションの支援に加え、高次脳機能、摂食嚥下へのアプローチ、聴覚など各分野への更なる専門性が求められている。また職場ではコメデ

ィカルスタッフとしてチームアプローチに参加するメンバーとなる。

現在、言語聴覚士学校養成所カリキュラム等の見直しが進められ、令和7年4月の入学生から新基準が適用される見込みである。本学科では、新基準に照らした取得単位数の変更は終了している。今後は指導内容の更なる充実を目指していく。そ

^a 長野医療衛生専門学校

〒386-0012 長野県上田市中央2-13-27

info@nagano-iryousei.ac.jp

ここで我々が言語聴覚士の養成において目指すべき人材像、臨床現場で求められる人材像を探るため、臨床実習指導者の意見から検討することとした。

2 方法

(1) 対象

令和5年度に本学科の臨床実習を受け入れた31施設にアンケートを送付し、10件の回答を得た。

(2) 調査の方法

調査項目は、日本言語聴覚士協会¹⁾が定める「言語聴覚士に求められる資質と能力」として提示している10項目に添って設定し、実習生を通して見えた本校の指導への意見、及び今後の新人言語聴覚士に求める姿を自由記述で回答する方法で行った。質問項目を表1に示す。

表1. 質問項目

言語・コミュニケーションおよび摂食嚥下は人間の生命、生活や文化を支える基本的機能であり、このような機能に問題が生じた人々に専門的に対応する言語聴覚士は、下記の資質と能力を備えることが求められる。	
(社)日本言語聴覚士協会	
① 豊かな人間性と対象者中心の思考	⑥ リサーチ・マインド (科学的探究心)
障害の有無、年齢や性別の差異、文化や国籍の違い等に関わらず、すべての人々に公平に接し、生じた問題を深く理解し、思いやりを持って「対象者中心の言語聴覚療法」を実践する。	科学的探究心をもって臨床に臨み、自分の臨床を客観的に検証すると共に、学術・研究活動に関与する。
② 倫理的な態度	⑦ 安全管理
保健・医療・福祉・教育に携わる専門職の倫理および言語聴覚士の倫理を遵守する。言語聴覚士の職業倫理は(社)日本言語聴覚士協会が定めている。	対象者および臨床関係者にとって、安全で不安のない臨床環境を提供する。
③ 確かな知識・技術と根拠に基づく臨床	⑧ 社会的役割
進歩し続ける言語聴覚障害分野および近接分野の知識・技術を身につけ、現時点で最善の言語聴覚療法を提供する。また「根拠に基づく臨床(EBP: Evidence-based Practice)」を対象者の意向や臨床状況に配慮しつつ実践する。	言語聴覚士として社会的役割を担い、専門領域の課題を共有し解決するよう努める。
④ コミュニケーション力	⑨ 後進の指導
心理的・社会的背景に配慮して、対象者およびその家族と良好な人間関係を築く。	後進を指導する態度・知識・技能を身につけ、臨床実習や臨床現場において学修の段階性に基づく指導に努める。
⑤ 連携力	⑩ 生涯にわたって学び続ける姿勢
他職種と連携して「対象者中心の臨床」を実践する。	生涯を通して学び続け、知識・技術の更新に努める。

3 結果

解答は自由記述であるため、内容の共通するものはまとめて記載する。また、解答内容により、受け入れた学生に対するものを【報告】とし、その他を【意見】とした。できる限り解答のままの文言を採用して記載する。

① 豊かな人間性と対象者中心の思考

【報告】

学生らしく対象者中心に考えることができていた。問題理解への努力が見られた。

公平に接することができていた。

思いやりをもって接することができていた。

【意見】

ボランティアなどで、高齢の方と接する機会を設けるとよい。

人として、どのように人と向き合うかが大切である。

STの視点で考えることを基本として、対象者の生活全般を視野に考えられるとよい。

「公平」ということを考えられると、提案の幅が広がる。

② 倫理的な態度

【報告】

医療者としての立ち居振る舞いを学ぼうとする姿勢が見られた。

医療従事者を目指すものとして、適切な表出や思考ができていた。

毎日のフィードバック後に、高められていく様子が分かった。

【意見】

実習を通じて多様なST像を学んでほしい。

実習では、いろいろな職種と助け合って臨床ができていていて感じていることを感じて欲しい。

抽象的でイメージは難しいだろうが、ケースを通じて感じて欲しい。

対象者を尊重するのはもちろんであるが、スタッフとも互いに良い関係でいる必要があることを知ってほしい。

私たちも自身を振り返りたい。

③ 確かな知識・技術と根拠に基づく臨床

【報告】

教科書で得た学びを実践しようとする姿勢が見られた。

症状の把握は一部が可能であった。

評価の段階から根拠を意識的に確認する必要がある。

知識・技術には未熟な点がある。根拠との結びつけが難しい。

【意見】

論文等で知識を得た上で、目の前にいる患者の反応をしっかりと見て判断できる力を養ってほしい。最新の情報に興味を持つこと、的を射た文献の検索力と選択する力は学生時代から慣れていく必要がある。

最新で最善の言語療法の提供は、資格をとって臨床に出てからという印象を受けた。

臨床経験は少なくとも、基礎知識は必要。解剖学、生理学、運動学はより高いレベルを学んでほしい。

患者さんの背景や意向を考慮して、オーダーメイドの臨床を行っていることを知ってもらいたい。

評価の段階から根拠を意識することを校内で学んでほしい。

重症・長期の療法でスタッフの自己研鑽が不足しがちな中であると、学生からの刺激・情報提供はありがたい。

④ コミュニケーション力

【報告】

良好な人間関係を築こうとする試みがみられた。

考えがあっても、言語化するまでに時間がかかる。表現が抽象的で稚拙である。

コミュニケーションが受け身である。

自ら積極的に会話をし、話題を広げていくことが苦手な様子が見られた。

患者の人柄を選定して実習生の担当とした。

【意見】

患者は受け入れがよい方だけではないので、どのような方にも対応できることが理想。

STとしてだけでなく、プライベートでもいろいろな方とコミュニケーションをとって、いろいろな考え方を吸収してほしい。

配慮の方法などは多様な年代の方と関わる経験を通して、今後学んでほしい。

外部の人と話す機会を学生のうちから作っておくことで、社会性が養えるのではないかと思う。

STの実習生より理学療法士(以下PT)、作業療法士(以下OT)の実習生の方がコミュニケーションの力が高い印象がある。自分に自信をもって積極的にアプローチしてほしい。

カルテではわからない対象者の表情や心情を読み取ることや察する力が備わっているとよいと思う。

⑤ 連携力

【報告】

在宅を中心に実習したため、連携の実際を学ぶ機会がなかった。

【意見】

コミュニケーション能力がないと、他職種との連携は難しい。

イメージはできているけれど、よくわからないことも多いと思う。

学生が連携をイメージするのは難しいが、できる限り具体的に指導したい。

連携の機会を作ることはできなかったが、見学はできた。

校内では難しいだろう。実習で経験させたい。

PT、OT、ST、急性期、回復期、療養型、通りハ、看護師、介護福祉士との関わりがある環境を提供

している。

他職種の強みを学内でも学べるとよい。

連携は大切だが、学生が自発的に取り組むのは難しい。働いてから繰り返し経験で学んでほしい。学生時代に、他科とのディスカッションなどあるとよいのでは？

⑥ リサーチ・マインド(科学的探究心)

【報告】

学校での学びを実践しようとする試みは見られた。患者の評価において比較・検証する姿から、探求心を感じた

自身の臨床を客観的に検証することが難しかった。

【意見】

全体的に探究心が乏しい印象を受けている(学生・既卒)。

いつでもクリニカル・クエスチョンをもって臨床に臨めるとよい。

実習では対象者を評価することで精いっぱい、客観的に検証することは難しいだろう。

ビデオ等で自身の様子を振り返る学習があるとよい。

特定の分野をおもしろいと感じるか、または自身の知識不足を痛感できることによって学ぼうという意欲につながると思う。

問題をスルーせず、どうしてだろうと考えられるとよい。

⑦ 安全管理

【報告】

感染症対策ができていた。

【意見】

PT、OTのクリニカルクラークシップの流れ(見学→模倣→実施)により学べる環境は整っている。自分自身の行動が周りにどう影響を及ぼすか考える力を、実習前から養ってほしい(報告、指示を受けるべきことの判断)。

臨床ではとても重要なことであるが、学校での授業や実技（一次救命処置など）は少ないのでは？感染症対策に関する学習を継続してほしい。

移乗、移動時の転倒リスクを予め考えられるか、事例をもとに検討することも大切。

バイタルチェックができるように。

せん妄や不穏などの精神症状の理解。

インシデントレポートからの考察なども有効だと思う。

自身の体調管理の徹底。

⑧ 社会的役割

【報告】

先を見通す力が弱く、その場限り、目に見える範囲のことしかできない。

【意見】

県士会活動について、考えていってほしい。

臨床に出てから考えてほしい。

ST の評価結果が患者の ADL にどう結び付くかを考えるとよい。

ST は需要の多い資格である。いろいろな分野にアンテナを張って行ってほしい。

医師や看護師に助言する場面が多い。最前線で取り組むこともある。専門性を感じてほしい。

病院・施設の地域性と担っている役割について知ること、ST の仕事の理解が深まる。

⑨ 後進の指導

【意見】

学生の段階では、自身の課題や自己分析ができればよい。本人の特性を抽出できればよい。

知識的な所だけでなく、その学生の「段階」を考えて指導したい。

教える立場で初めて知識や技術を自分の中に落とし込めた。実習を通して病院側も学ぶことは多い。

病院スタッフにとっても必要なこと。

学生は後輩に伝えてほしい。特に患者の接遇は机

上では学べない。

実習中は教科書で学んだ症状を始めて見たと言われることが多い。点と点がつながるまで理解するのは難しい。

⑩ 生涯にわたって学び続ける姿勢

【報告】

学内・教科書の学びを実践しようとする試みがあった。今後も継続してほしい。

【意見】

目先のことで精いっぱい自身技術の更新までは手が回っていない。

障害名や定型の訓練に対し、自動的にならないようにしたい。

教科書、制度、知識、技術は日々変化しているので、ST でいる限り当然必要であると伝えてあげたい。

自分で調べ、考えた臨床によって患者さんの症状が改善したり喜んでもらえたりする経験が学び続けるモチベーションになるのではないかと思う。

学生が直接経験することは難しいので、指導者がその姿を見せてあげたい。

4 考 察

今回の調査に当たっては、社団法人日本言語聴覚士協会言語聴覚士養成教育ガイドライン 2018 で示されている「言語聴覚士に求められる基本的な資質と能力」の 10 項目について質問した。これは、平成 24 年に言語聴覚士養成教育モデル・コア・カリキュラム諮問委員会が養成校と臨床実習施設へのアンケート結果を踏まえ示したものである。10 の項目に分かれてはいるものの、その内容は関連するところも多い。重なりを我々なりに捉えたイメージを図 1 に示す。この 10 項目は、言語聴覚士に求められる資質と能力を適切に網羅しているものの、項目名と指し示す内容に判りにくい部分もある。今回はそれをそのまま質問項目とし

て使ったため、回答しにくかった面もうかがわれた。それを踏まえてすべての項目に共通しているのは、他者を尊重し多様な年代と接することを厭わない態度が求められていることである。患者さ

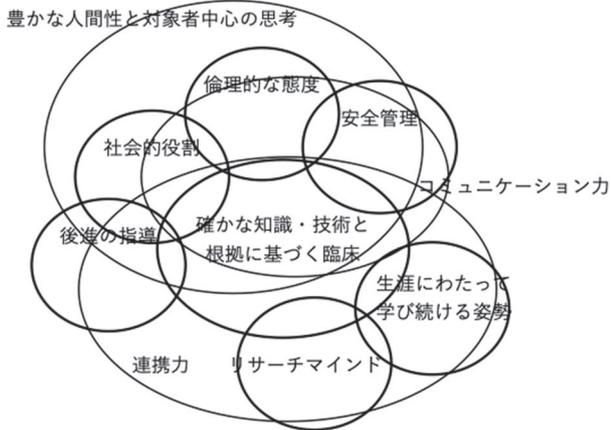


図1. 10項目が重なるイメージ

んに対応する場面はもちろん、チームの一員として働く際の良好な関係づくりにも必要であるこの態度に対して、学生の未熟さが指摘されている。経験不足による不安や、苦手意識から受け身になる学生も多い。職場の基本とされる「報告・連絡・相談」もコミュニケーションに躊躇することで、失敗経験に繋がる場面を経験する。広い年代とコミュニケーションを重ねる、学校外部の人と一定の役割の中で会話する機会を作ることが、この課題の対応として考えられる。具体的にはボランティア活動やアルバイトで社会性を養うことを勧めていくことに併せて、校内で取り組める試みを検討していく必要がある。

多職種連携については、施設ごとに取り組み方や業務の流れには違いがあるが、他職種の職性を理解し、協働することの基本は変わらない。校内に3学科、兄弟校を入れると5つの専門職を養成している本校においては、他職種の職性に興味を持ち、理解し、学科を超えて尊重し合える場面作りができるものとする。

言語聴覚臨床に対する具体的な意見の中には、

臨床的根拠を常に意識することや探求心を持つこと、問題に突き当たったとき調べ、考える力を備えるべきであること、また自分の臨床を客観的に評価できる力を育てることも重要であることが読み取れた。

最後に、言語聴覚士として患者さんの背景を理解し患者さんの人生をイメージする力を備えるためには、自分の世界を広げ、多様な考え方をすることも必要であろう。

実習を臨床経験のスタートとして捉え、教員と実習指導者の共通理解のもと、医療専門職として職場に入ってくるまでの在学4年間に我々が担うべき役割について、今後も考えていきたい。

謝辞

本研究にあたりお忙しい中質問紙にご回答いただきました、実習指導者の先生方に深謝いたします。

利益相反の開示

本研究に関する利益相反はありません。

文献

- 1) 社団法人日本言語聴覚士協会 言語聴覚士養成教育ガイドライン 2018